

# Oho~!! Ramailo Jiwan in Nepal

みなさま。こんにちは！ 先日の日曜日も「日本人ですか？」と聞かれた渋谷です。完璧な日本語、日本人らしい(?)服装にも関わらず、よく外国人に間違われます。なぜでしょう？

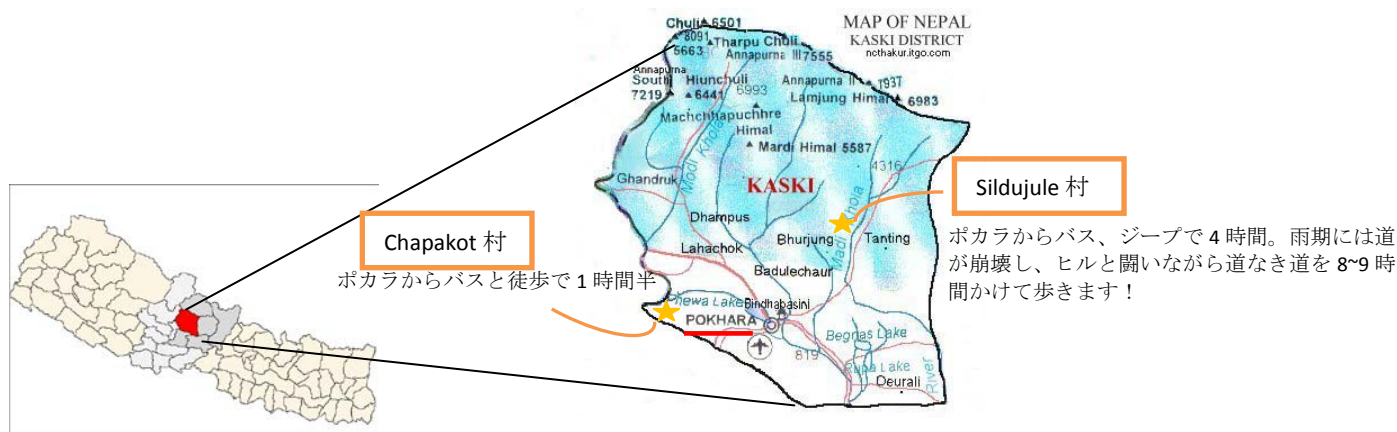
それはさておき、参院選、自民党が圧勝しましたね！ わたしも、1票を投じてきました。ネパールで思ったことの一つは、住民が意見を述べるコミュニティは強いということ。自分たちでお金を集めて道や公共の水汲み場を建てたり。住民が意見を述べるから、村役場の責任者もきちんと仕事をこなす人が就任し、村の学校、クリニックはきちんと運営されます。進学率もかなり高いと思います。反対に、ジェンダー、カースト、民族、政党の関わりなどで、住民がなかなか意見を口にすることが難しいコミュニティでは、暮らし向きは良くなく、あらゆる面で本来得られるはずのサービス、情報を得ていません。病人が体調が悪い中、山道を数時間歩いてきたのに、クリニックはスタッフがサボって閉まっていたり、学校では授業は満足に行われず、生徒も先生も日向ぼっこ。村には学校にいない子供もたくさん。そんな経験から、住民が意見を述べることは大事であり、日本では1票が個人の意見表明の証だなぁ、と考えるに至り、お恥ずかししながら、実は人生で初めての投票をしました。

さて、前座が長くなってしまいましたが、今日の本題は「私が何をネパールでしてきたか」です。

JICAからの要請内容と、ポカラを拠点とした活動地は以下のとおり。

<JICAからの要請内容> 村の保健・公衆衛生問題の調査を行い、対策を立案する。

<活動地> Kaski郡 Chapakot村 ヘルスクリニック、同郡 Sildujule村 ヘルスクリニック



## ネパールで行ったこと 子宮脱問題の発掘とその対策

「子宮脱」は、わたしが行った仕事の中で一番上手くいった仕事です。赴任して 1 年少したつたころに、Chapakot 村の友人カマラさんから「自分の義理のお母さんが子宮が落ちていて、病院へ行くことをすすめても、落ちていることを否定する。」という話を聞いたのが、「子宮脱」を知ったきっかけです。子宮が体外に出て、野球ボール大の子宮が股にぶら下がっている状態です。ヘルスクリニックの助産師カマラさんと、村の 9 カ所をめぐり、「子宮脱」の原因と症状、治療方法について説明を行ったところ(字を読めない女性がほとんどですので、イラストを描き説明をします)、このクラスが、毎回ヒットし、女性が毎回 50 人ほど来てくれました。



助産師カマラさん。彼女の村人への接し方は本当にステキです。どんなカーストの人にも平等に接します。夜の出産にも家から飛んできてくれます。ネパールではなかなかそういうことができる人はいません。

これは、かなり深刻な問題では、とポカラから看護師を呼んで医療キャンプを行ったところ、81 名女性が来院、41 名が子宮が落ちこちている状態でした。落ちている人の中には、20 年以上もこの症状で苦しんでいた人も。旦那さんに相談する方が多いのですが、病院にいったことがない方が大半。実は、子宮脱はネパールで多くの女性が罹患していることから、(気ままな!!)政府によって、1 年のうち、数ヶ月だけ無料の手術が受けられますが、ヘルスクリニックスタッフを含めて全員が、無料手術が受けられることを知りませんでした。

子宮脱に関して、村人のみならず、ヘルスクリニックスタッフや、村に 12 人いるヘルスボランティアの女性に主に働きかけた結果、うれしい変化が 3 つあります。

### 1. ヘルスクリニックスタッフの意識変化

当初、ヘルスクリニックスタッフたちは「わたしたちの村は発展しているから、子宮脱の問題はないよ」と言いはり、第一回の医療キャンプは私がかなり強く押し進めるあまり、気まずい雰囲気になったことも。ですが、キャンプを行った結果、思った以上の患者数に、スタッフたちは、「Chapakot 村は子宮脱が深刻だ」というようになりました！わたしの送別会で、出席していた郡保健事務所のスタッフに、次回の医療キャンプの話を取りつけていたのを聞いたときには、こっそりとほくそ笑んでしまいました。私がいなくなっても自分たちで続けてもらえるかどうか、仕事の成功の鍵だと思っています。

## 2. ヘルスボランティアの自信向上

各村には、予防接種のお知らせや、健康に関して基礎知識を教え、消毒液や避妊用具を配ってくれる9人~12人の女性のヘルスボランティアたちがいます。村の多くの女性がそうであるように、彼女たちの多くは字を読むことができず、人前で自分の名前を述べるのも恥ずかしがってしまいます。(教育を受けていないことで、こういう問題が出てきます。) ですが、ヘルスボランティアである彼女たちが子宮脱に関して、正しい情報を、人前で話せるかどうか、重要。ポイントを説明し、何度か、人前で一緒に話す機会をもったところ、一人で正確な情報を人前で話せる人が3人に増えました。(たった3人ですが、私にとっては「3人も」です!)



## 3. 村人の行動変化

当初、恥ずかしがって、10年、20年も問題を一人で抱えていた村人たちが、少しずつではありますが、噂を聞きつけて、受診してくれるようになりました。帰国までに総勢130名ほどが受診してくれました。

## ネパールで行ったこと その他編

ヘルスクリニックの運営がうまくいって、村人の知識や意識向上に特化したいChapakot村では、子宮脱対策の他に、

日本映画「いのちの山河」のネパールバージョンを保健・コミュニティー開発隊員7名でつくって(2時間分を翻訳!プロの声優雇いました)、女性組合やクリニックスタッフにみせ、日本の乳児死亡率がどのように減少させたかを見せたり・・・こちらは、テレビでも放映されました!



あとは、

こんな痛々しい歯をもつ大人をうみださないよう・・・



数日に1回、朝のお祈り前にしか歯を磨かない、虫歯率100%の学校の子供たちに、夜、毎日小さい頃から磨くことの大事さを教えたり・・・ 渋谷脚本の劇で教えるとウケも理解もよかったです。



時には赤ちゃんまで乱入。なんとかわいらしい！！





一方、ヘルスクリニックの運営が上手くいっていない Sildujule 村では、

「ヘルスクリニックに求めるサービスは何？」ワークショップをクリニックスタッフと一緒に開き、クリニックのサービスで欠けていることを、村人からクリニックスタッフに伝える機会をつくったり・・・（このワークショップで、クリニックスタッフが村人から内緒で往診料を受け取っていることが分かったり、村人とクリニックスタッフとの関係が浮き彫りになり面白かったです） ちなみに、村の多くの女性が満足に字を読めません。このワークショップでは、豆と絵を使いました。



他に、村人から構成されるヘルスクリニックマネジメント委員会の強化を図り、今後の方向性を決めるよう試みたり・・・（クリニックのお金の使用は村人からなる委員会によって本来承認されますが、全くもって、上手く機能していません。例えばお金は使うものではなく、貯めるものと思われており、物品が何もありません。）が、結局5人いたスタッフのうち4人が辞め、うまくいきませんでした。



おっと、こちらは夜な夜な村で行われている賭博の風景。

正しくはこちらの写真です。



などなど、行ったことはたくさんあります。「いっぱい考えて、動いて失敗しまくり、食べ過ぎた 2 年間」という言葉に集約されるかと思います。仕事の成果はお恥ずかしながら、おそらく 1 勝 30 敗ぐらい。。。長々と書きすぎたので、失敗談はだいぶ割愛していますが、日本と異なる仕事の進め方、環境、キーパーソンの見極めなどが難しく、その点に関しては失敗だらけです。ですが、面白く、貴重な失敗だったと思っています！

最後に・・・

### <ネパール豆知識>

雨期には毎日のようにヒルに血をすわれまくり・・・靴下からも、靴からもにゅると潜り込んできます。靴下から大量にヒルが潜りこんでいくのを目撃したときは失神しそうになります。長靴をはいても、這い上がってきて、長靴の中は血だらけなんてことも。初めて左手で用をたしたときも、土砂崩れで土砂に太ももまで埋まったときも、ヒルより恐くなんてありませんでした。そのくらいヒルは不気味です。



ヒルを無理に剥がすと、傷跡がのこってしまいます。わたしはそのことを知らず、子供たちに引きはがしてもらっていたら、50 カ所以上の傷跡が足に残るといって、20 代女子としてはあるまじき足になってしまいました。(だいぶ消えてはきましたが、まだあります) もはやスカートは、はけません。

そこそこに生えている、よもぎの葉をつぶして汁気をだしてヒルをつかむ、という方法もいいのですが、ぜひヒルがでそうな地域を歩かれる方は、**塩と油**を足と靴下に塗り込み完璧な予防を。ヒルにお気をつけてお出かけくださいね♪ 以上、豆知識でした。

今回は、ネパールの日常の風景をお送りしたいと思います。

フェリベトーン!